

狩野川放水路

中部地方の
選奨土木遺産

令和2年度登録

所在地：静岡県伊豆の国市・沼津市 竣工年：1965（昭和40）年
管理者：国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所
認定理由：建設省三大放水路の一つ。流域の水害防止のために施設された人工水路で、トンネルで丘陵地を抜くなどにより治水の要となっている施設である。



長岡トンネルの吐口下流からの風景。

狩野川は、伊豆半島中央の天城山系を源流とし、北流して沖積平野の田方（たがた）平野へ出ると複数の支川と合流しながら蛇行して沼津市街地へ至り、西へ方向を変えて駿河湾へ出る複雑な流路をとる一級河川である。流域の地質は大部分が山噴出物と溶岩であり、多雨地帯を流域に抱えていることから、古くから下流市街地に多くの洪水被害を発生させてきた。

1948（昭和23）年のアイオン台風により、狩野川本川のみで洪水を流下させることの限界が明らかになり、それまで計画されてきた国直轄事業の方針が再検討され、丘陵を大規模にくり貫く放水路開削が1951（昭和26）年に始まった。

工事途中の1958（昭和33）年に狩野川台風が未曾有の出水をもたらしたことで大幅に計画が変更され、放水路が負担する分派量を2倍の2,000 m³/secと見直し、各処で困難な設計変更にも挑んだエンジニアのドラマがある。

令和元年の台風19号は狩野川台風を上回る量の降雨をもたらしたが、狩野川は氾濫や堤防の決壊を免れた。これは狩野川放水路によって約7,400億円の防止効果を挙げたと推定され、まさに掛け替えのない存在感を現在も示している。



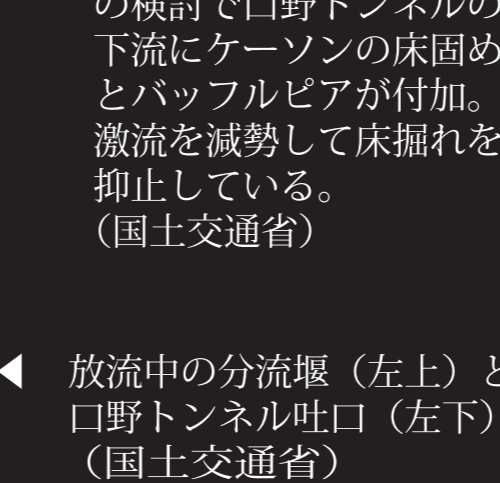
▲ 狩野川台風による長岡あたりの被害状況。放水路計画の再検討を余儀なくされた。（提供：毎日新聞社）



▲ 狩野川台風前の長岡トンネル建設状況（左）と狩野川台風後の同建設状況（右）。トンネルの底を深掘りするとともにトンネルの数も1本増設して、分流する水量を2倍にした。限られた地形条件の中でトンネルを近接配置させる必要があり、模型による実験などにより、トンネル断面形状、間隔が慎重に設計された。（国土交通省）



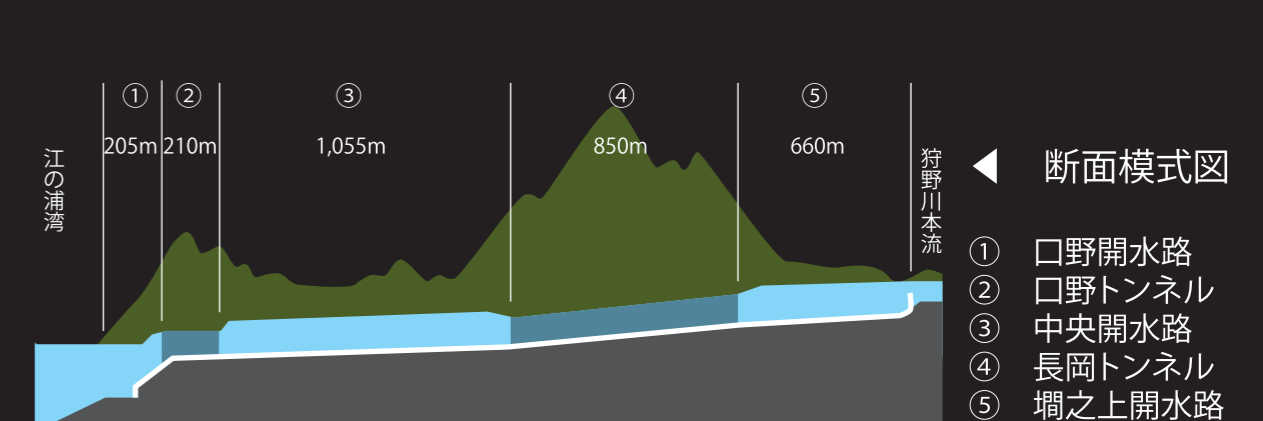
▲ 竣工後は水面下になって見えないが、計画変更時の検討で口野トンネルの下流にケーソンの床固めとバップルピアが付加。激流を減勢して床掘れを抑制している。（国土交通省）



◀ 放流中の分流堰（左上）と口野トンネル吐口（左下）（国土交通省）



▲ 狩野川下流にあたる沼津市街には、御成橋（選奨土木遺産）がある。



◀ 断面模式図

- ① 口野開水路
- ② 口野トンネル
- ③ 中央開水路
- ④ 長岡トンネル
- ⑤ 棚之上開水路

